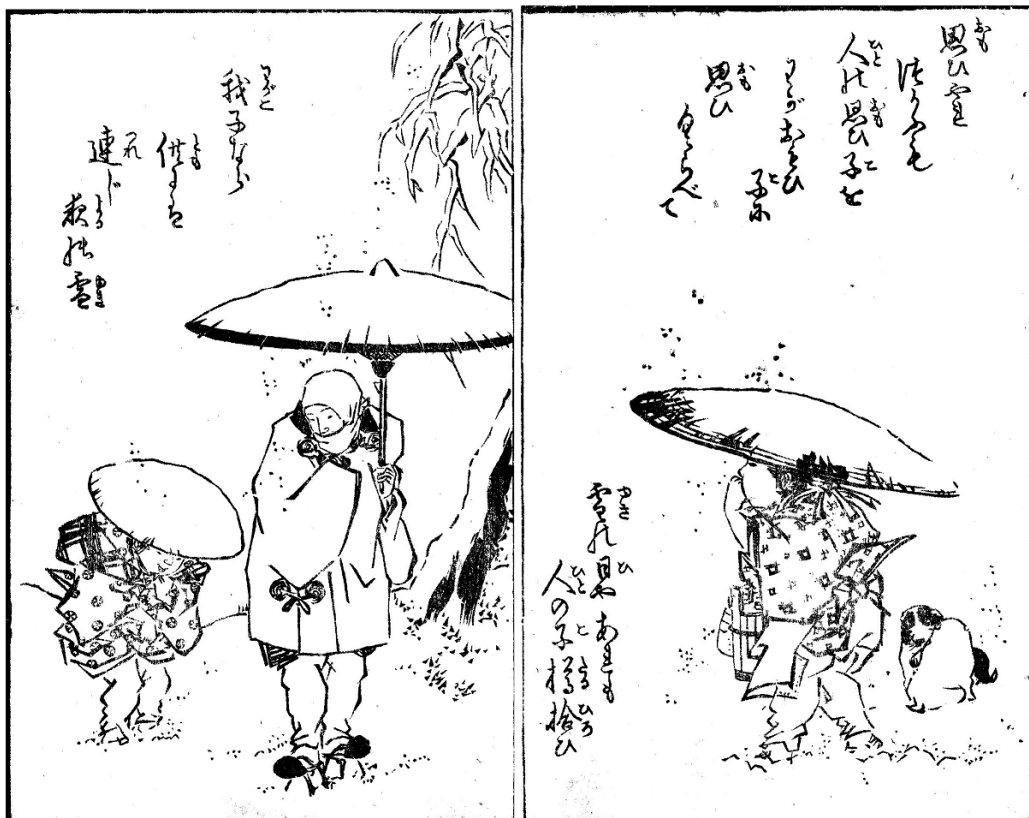


■奉公をめぐる子育ての情景

○挿絵を読み解く①——『主従心得草(2編)』(1843)



○挿絵を読み解く②——『心学教訓図会(初編)』(1843)



○挿絵を読み解く③——『主従心得草(2編)』(1843)

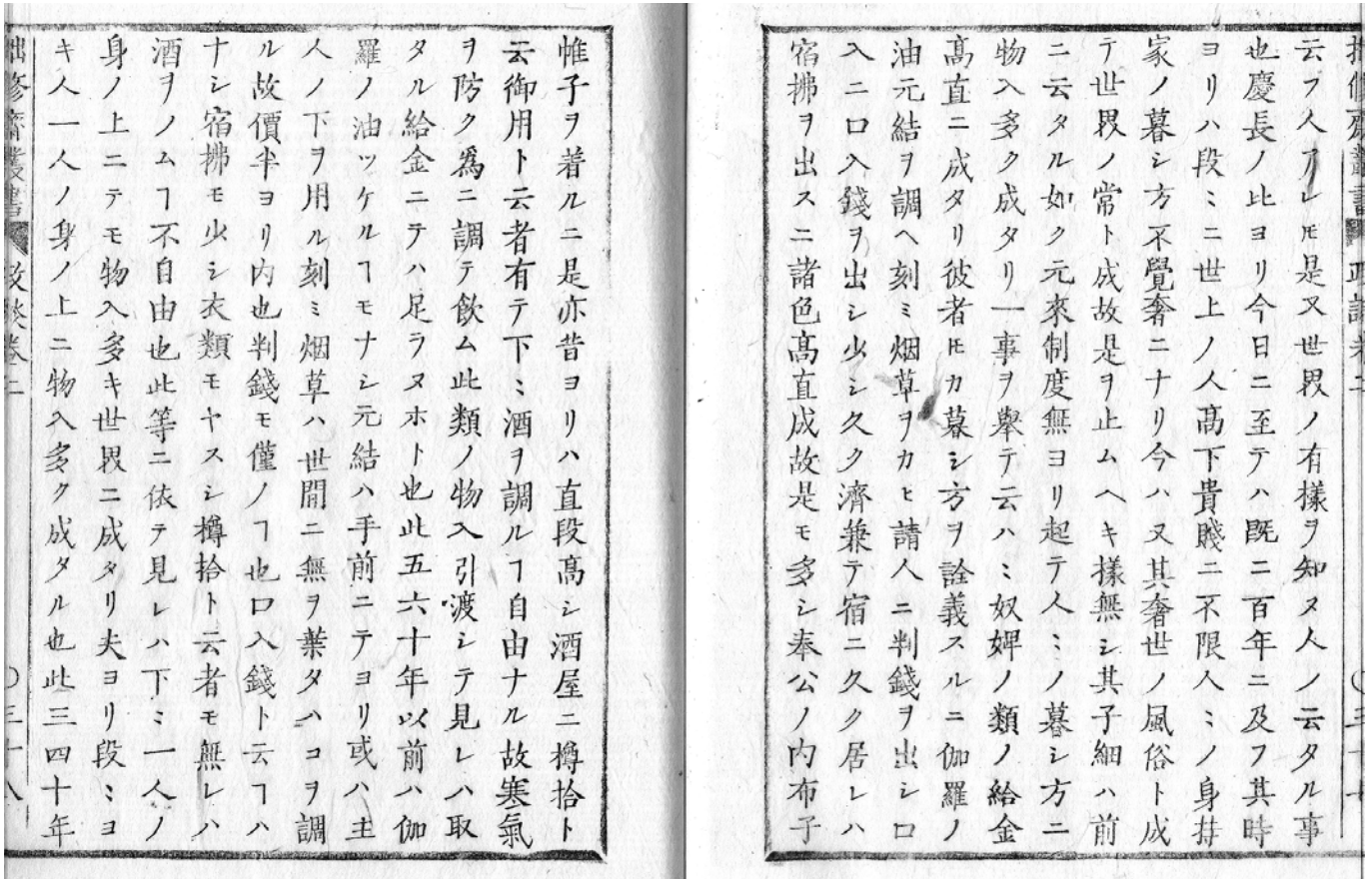
○^{やぶい}藪入り *Wikipediaほか参照

- ・「藪入り」=正月および盆(7月)の16日に、奉公人が暇をもらって親元または請人うけにんの家へ帰ること。また、その日。宿入り。宿下がり。
- ・主人は、奉公人たちにお仕着せの着物・履物や小遣いを与え、さらに手土産を持たせて実家へと送り出した。
- ・実家では、親子水入らずで休日を楽しんだ。
- ・遠方の者など実家へ帰ることができない者も多く、彼らは芝居見物や買い物などで休日を楽しんだ。
- ・文明開化後も商家の労働スタイルに大きな変化はなく、産業化の進展に伴い労働者数が増大したため、藪入りは一層大きな行事となった。藪入りの日は、浅草などの繁華街は奉公人たちで賑わい、特に、活動写真(映画)はこれによって大きく発展した。
- ・第2次世界大戦後、労働基準法の強化などにより労働スタイルが変化し、日曜休日の定着によって藪入りはすたれ、正月と盆の休みに統合された。

○荻生徂徠 『政談』(享保12年(1727)頃成立)

・「酒屋二樽拾ト言、御用ト言者アリテ、下々酒ヲ調ルコト自由ナル故、寒氣ヲ防グ為ニ調テ飲ム。…樽拾ト云者モナケレバ、酒ヲ呑コト不自由也」

★「樽拾い」についてどう述べているか？



* 『政談』は、元禄～享保期の政治・社会問題とその対策を提言したもの。町人の経済的台頭と物価高に伴う武士の経済的困窮、貨幣経済の農村部への浸透、江戸における人口集中と都市問題の増加、社会全体の奢侈的傾向と風俗の悪化に警鐘。これら諸悪の根元を商人に求め、「商人ノ瀆ル、事ヲバ、嘗テ構フマジキ也」と言った。

- ・商人は「骨折ズシテ坐ナガラニ利ヲモウクル」不屈きな存在。
- ・商人達は手数料だけで巧みに金儲けをするシステムを作り上げ、その儲け方も巧妙になり、さらにグループ企業を形成し、それらの莫大なコストのため物価が下がることはない。
- ・こうした現状を奉行も役人も全く理解していない、放っておけば武士の手に負えなくなると、徂徠は大いに危機感を煽った。

* 荻生徂徠

[生]寛文6(1666). 2. 16. 江戸/[没]享保13(1728). 1. 19. 江戸

江戸時代中期の古文辞学派の儒学者。名は雙松、字は茂卿、通称恕右衛門、号を徂徠(徂来とも)、別号護園(護=かや・すすきの意)。父方庵(法眼景明)は徳川綱吉の侍医、徂徠はその次男。林春斎、鳳岡に学んだ。柳沢吉保に仕え、吉保隠退後は日本橋茅場町、いわゆる護園の地に居を構え子弟に講義したので、彼の門流を護園学派という。その学問は政治社会に対する有用性を眼目としており経世済民の儒学と概括することができる。初め伊藤仁斎に私淑するがやがて終生の対決者となる。それは徂徠の側での感情的な問題もあるが、根本的には考え方の相違による。徂徠にとって道は中国の古聖人の制作になる利用厚生

○西村次郎兵衛「奉公人には親心で接し、情けをかけよ」 * 『親子茶呑咄』第13章「下人召使う心得の事」

【奉公に出す親の気持ちを思え】家が貧しく、7、8歳の我が子を他人に預ける不憫さや、親が涙を見せずに、あえて子どもを叱って奉公に勤めさせる親心を推し量ってみよ。

【奉公人の食事には十分配慮せよ】主人だけが美食を貪り、奉公人へまずい食事を控えめに与える「世帯上手」は愚の骨頂だ。奉公人の食事はできるだけ良い物を提供するように指示し、時には主人自ら奉公人の食事を試食せよ。奉公人に食事の我慢をさせてはならない。食は命の基であり、食べ物への思いは誰でも深く、美味しいものは誰もが我慢できないものだ。朝夕責め使われる奉公人はなおさら空腹に違いない。

【奉公人を長い目で育てよ】わが身でさえ自分の思うように使えないものだ。奉公人に常に「節約、節約」と言っても、主人自身が実行できないものだ。奉公人が失敗しても強く叱らず、納得するように言い聞かせよ。その失敗を二度言ってはいけない。このように育てていけば、奉公人は一生懸命働くようになる。そして、長年の奉公後に暖簾分けした後もずっと応援してやれ。こうすれば、家の為にもなり、後輩も主人を頼もしい人だと思ってくれます。頑張って働くようになる。

【奉公人が病気の時は十分看護せよ】奉公人がたまたま病気で寝込むと仮病と疑ったり、同僚にもそう言い付けて薬の世話もしないのは主人として情けないことだ。このような時は、主人自らが面倒を見てやり、同僚にも指示して薬や食事の世話をさせ、食べ物もいつもより少し良くしてやるがよい。そうすれば、勤め方が不十分な奉公人でも、長い間には十分に勤めを果たすようになるものだ。

【主人の無慈悲は奉公人の怠慢をもたらす】「奉公人は誠意が無く陰日向がある」というのは大きな心得違いだ。…奉公人に対する食べ物や着物を粗末なものにし、無慈悲で厳しくするだけでは、奉公人の陰日向や仮病は多くなり、一家の不利益も見て見ぬふりをするようになって、一つも得なことはない。以上は全て主人の心一つである。

○遺書同然の父からの手紙——『子供教草(教訓状)』

【子供教草】

- ・中居撰之助(重兵衛・剛屏^{ごうへい})編(35歳の著作)。
- ・嘉永7年(1854)序・刊。[江戸] 中居撰之助施印。
- ・ある伊勢商人が息子を江戸本郷の商家へ年季奉公に出し、その際その父が息子に送った教訓の手紙(教訓状)をそのまま上梓したものの。この手紙に感動した編者による私家版で、「教訓状」に続けて「堪忍」についての小文を追加した。
- ・「教訓状」は全7カ条。まず人間生活の基本である食事への感謝を説き、その食事はすべて主人のお陰であることを肝に命じて精勤すべしとの第1条以下、衣服について、諸品の倹約・始末・住居について、酒について、忠孝について、そして、初心を忘れないことの7カ条を掲げ、最後にこの教訓文を時々読み返して反省するようにと諭す。

【中居撰之助】

- ・吾妻郡中居村(現・吾妻郡嬬恋村三原)の人。
- ・文政3年(1820)～文久元年(1861)。42歳。墓は、小石川還国寺、また吾妻郡中居家墓地。
- ・初め黒岩氏。幼名、武之助。通称、撰之助・重兵衛。号、剛屏・梅遅。
- ・天保13年(1842)江戸に出て、本町の書肆・和泉屋善兵衛に勤め、傍ら佐久間象山の塾に学び、江川坦庵・高島秋帆の知遇を得、さらに伊東玄朴について蘭学を修める。後、故郷に火薬製造所を作るが、安政6年(1859)横浜に移り生糸貿易に従事して巨利を得、横浜一の商家となる。幕府の生糸輸出制限令に違反して捕えられ牢死か、また、倒幕の志士に経済的援助をした廉^{かど}で追われて姿を消したとも。



【子供教草の要旨】

【序】 手紙の文章は拙いが、親の子を思う真実、慈悲の心に溢れており、思わず落涙した。親は常に子を忘れないが、親を忘れる子は多いであろう。この手紙を出版し、手代や丁稚に読ませたら、少しは親の気持ちを知り、主人の恩にも感謝するだろう。このような教訓は面白い読み物ではないが、生涯の宝となるので辛抱して読んでほしい。

- ①人間が生きていく根本は食である。お前が毎日美食を頂戴し、格別に骨の折れる仕事もせずに今日を無事に過ごすのは全くご主人様のお陰であり、お前の身命はご主人様のものである。日々のご奉公も、ご主人様の体でご主人様の御用を果たすのだから、少しも身を惜しまず、御家法を守り、万事儉約に徹し、ご主人様のためにならぬ事はせず、商売に専念しなさい。
- ②暑さや寒さをしのぐ衣服も人間生活には欠かせない。お前が季節に応じた衣服を頂き、暑くなく寒くなくいられるのは全くご主人様のお陰である。どんなに粗末な服でも奉公は十分勤められるし、奉公人の衣服が粗末なことを笑う者はいない。かえって、奉公人の立派な身なりを見て「行く末が心許ない」と人が笑うものだ。ただし、外で他人と会う場合は、ご主人様の外聞にも関わるので、見苦しくなく相応の格好をしなさい。とは言え、お前の身分では木綿の綿入に前垂掛(奉公人の粗服)が最高の服装と心得なさい。
- ③衣服を始め万事儉約に努めなさい。世の中に役立つ物は自分の物も人の物も、紙一枚でも菜一葉でも無駄にしてはならない。お前の便りを見ると、初めの所を沢山あけて書き始めているがこれを費えという。手紙の相手によってはこうすべき場合もあるが、自宅への手紙は内容が分かれば十分だ。一事が万事だからよくよく気を付けなさい。とにかく、今のお前の身分はご主人様からの預かり物と考えて、衣服・手道具・箸一本に至るまで大事にして、なるべく粗末なものを使いなさい。
- ④住居も人間生活には欠かせない。しかし、ご主人様に仕えるお前は、雨風を遮る立派な建物で生活でき、衣食住にも難儀はなく、これを大安楽と言う。日々のご奉公をしっかりと勤めることが、衣食住のご恩に対するささやかな報いである。だから、ご主人様の御用にわが身を使うのは、結局、自分の金を自分の事に使うのと同じである。この理屈が心底理解できれば不忠・不孝は起こり得ないものだ。
- ⑤酒は用いようで善にも悪にもなる。40歳以前は血気盛んで前後の弁えがないから、まずは嗜まない方が過ちが少ないし、概して酒は益より損の多いものだ。お前を奉公に出す際に注意したように、40歳前に飲酒したら勘当するので肝に銘じておきなさい。お前も知っての通り、私も少々は酒を飲むが、お前に禁酒を言い渡した時から一滴も飲んでいない。お前も酒を断ってひたすら御奉公に努めなさい。そうすれば、将来、不自由な身持ちになることは絶対になかろう。お前が裕福になった暁に、私への経済的援助を期待して言うのではない。私は先が短く明日をも知れぬ身だから、お前の行く末を見届けることはないだろう。だからこそ、人並みに奉公してほしいという親心で言うのだ。酒は人と知り合うきっかけになるが、本当の心の交流には酒の力は必要ないし、万事、酒を頼りにするのは真実味のないことである。
- ⑥忠孝は実行し難いように思えるが、特別難しいことではない。お前の立場なら、ご主人様に仕え、持ち前の奉公に専念し、お客を大切に、商売に関することは何事も面倒と思わず丁寧に勤めれば、ご主人様が信頼し、親も安堵するのであり、それが忠であり孝である。「ご主人様大事」の中に親孝行も含まれる。忠孝は結局自分のためと信じて勤めれば、天の恵みを受け、万事不自由なく、一軒の主となって妻子や従業員を首尾良く撫育することができる。
- ⑦全て人間は、その初めを忘れて怠ることから様々の奢りが生じる。お前も初めて江戸に出た時には、ただご主人様や仲間から気に入られるように勤めることばかり考えていたはずである。しかし、2年、3年と年を重ねて一人立ちできるようになると、初心を忘れがちになる。人間の寿命が誰にも分からないように、翌日のことは分からないし、昨日は過ぎ去っている。だから、とにかく今を大切に慎み、今日をより良く生きることだ。夜、寝床で初心を思い起こして明日のご奉公を心に誓い、翌日はその決意の通り勤めよ。

【跋】 以上7カ条を、每晚あるいは暇な折にたびたび読んで日々の指針としなさい。心掛けの悪い人を見たら我が身を反省し、立派な人を見たら模範としなさい。自分の身を生かすも殺すも、安楽にするも苦勞にするも、お前の心一つなのだ。このほか色々言っておきたいことがあるが、大変忙しく、いささか心に浮かんだことを書いておく。草双紙の代わりにこれをよく読むように。

◎例えば、第5条「禁酒の戒め」では、「(自分は)もはや老年故、明日も知れ兼ね候命故、(お前の)行く未まで見届け申すことはとても叶い申さず。唯々、何卒人並みに相成り、傍輩衆(同僚)にも悪しく思われず、ご主人様の思し召しにもかない、首尾良く相勤め上げさせたくと思ふ親の慈愛ばかりにて、外には毛頭願ひ望みはこれなく候」と語るように、父の厳しくも慈愛に満ちた手紙には胸を打つものがある。

教訓状

夫人の御書にて、奉公申すに、居るべきに、おのれと考へて、
 今、今、食事の内、落して、命と信じて居る中、あつたや、世
 一統の命、申され、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 と申す、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 命と申す、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 毎日、居る、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世

申す、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 命と申す、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 毎日、居る、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 命と申す、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 毎日、居る、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世

一 凡そ、抜の儀、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 命と申す、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 毎日、居る、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 命と申す、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世
 毎日、居る、申す、おのれと信じて居る中、あつたや、世

せいの入海しれ前々入らむとて徳あらまのまゝなすてい返り地
 なるやいりの船より大後しくあふるま
 一 おりてわや ぬれ限いれのおし始末しつゝあつた一始末をえ
 徳伯の...で、吾輩もさういは徳伯しつゝ他人のまぢあひ
 とはたかひなせの中れ明らむ徳伯救ふてよとてさうい
 事一奉公の...しつゝいふ...しつゝいふ...
 一からあつたまぢつゝ一は吾輩しつゝ人のあひつゝ初めはさうしつゝ
 一自らのおぼろせを惜む...とてハハとわつたりあつたまぢ
 一徳伯...しつゝぬかすぬかすしつゝ一は徳伯...徳伯...

徳伯と吾輩...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...

五

...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...

...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...
 ...しつゝいふ...しつゝいふ...

六

自はあまもれよと云ふ中教ひのうしろは好むふは主人授ま奉
 りて身は己の氣を祿の下に信長をうらみし風をうらみしとて
 しも危きいふつふいふいふにけりかきおのてははれ食住
 にならば御体一たごまきおのてははれかきおのてははれ
 人面教つても初れ入るあはれいふはかきおのてははれ
 衣食住のつつまきと云ふはかきおのてははれかきおのてははれ
 教ひのうしろは好むふは主人授ま奉りて身は己の氣を祿の
 とて危きいふつふいふいふにけりかきおのてははれ食住
 にならば御体一たごまきおのてははれかきおのてははれ
 人面教つても初れ入るあはれいふはかきおのてははれ

同く一もあまもれよと云ふ中教ひのうしろは好むふは主人授ま奉
 りて身は己の氣を祿の下に信長をうらみし風をうらみしとて
 しも危きいふつふいふいふにけりかきおのてははれ食住
 にならば御体一たごまきおのてははれかきおのてははれ
 人面教つても初れ入るあはれいふはかきおのてははれ
 衣食住のつつまきと云ふはかきおのてははれかきおのてははれ
 教ひのうしろは好むふは主人授ま奉りて身は己の氣を祿の
 とて危きいふつふいふいふにけりかきおのてははれ食住
 にならば御体一たごまきおのてははれかきおのてははれ
 人面教つても初れ入るあはれいふはかきおのてははれ

てはあまもれよと云ふ中教ひのうしろは好むふは主人授ま奉
 りて身は己の氣を祿の下に信長をうらみし風をうらみしとて
 しも危きいふつふいふいふにけりかきおのてははれ食住
 にならば御体一たごまきおのてははれかきおのてははれ
 人面教つても初れ入るあはれいふはかきおのてははれ
 衣食住のつつまきと云ふはかきおのてははれかきおのてははれ
 教ひのうしろは好むふは主人授ま奉りて身は己の氣を祿の
 とて危きいふつふいふいふにけりかきおのてははれ食住
 にならば御体一たごまきおのてははれかきおのてははれ
 人面教つても初れ入るあはれいふはかきおのてははれ

同く一もあまもれよと云ふ中教ひのうしろは好むふは主人授ま奉
 りて身は己の氣を祿の下に信長をうらみし風をうらみしとて
 しも危きいふつふいふいふにけりかきおのてははれ食住
 にならば御体一たごまきおのてははれかきおのてははれ
 人面教つても初れ入るあはれいふはかきおのてははれ
 衣食住のつつまきと云ふはかきおのてははれかきおのてははれ
 教ひのうしろは好むふは主人授ま奉りて身は己の氣を祿の
 とて危きいふつふいふいふにけりかきおのてははれ食住
 にならば御体一たごまきおのてははれかきおのてははれ
 人面教つても初れ入るあはれいふはかきおのてははれ

